大江健三郎

核の大火と「人間」の声

岩波書店

大江健三郎

核の大火と「人間」の声

岩波書店

核の大火と「人間」の声

一九八二年五月一四日　第一刷発行©

定価一五〇〇円

著者　大江健三郎

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社　岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三陽社　製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目

次

I

1 核の大火と「人間」の声……1

2 核時代を生き延びる道を教えよ……35

3 「優しさ」を不可能にするものと闘うために……65
——障害児と私

II

4 小説と現実をむすぶ……99

5 ドストエフスキーから……131

6 作家としてフォークナーを読む……159

7 子規・文学と生涯を読む……197

8 フィクションの悲しみ……225

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

Ⅲ
9 核時代の日本人とアイデンティティー……257
10 核状況のカナリア理論……285
講演草稿として書くあとがき……311
——「広島行動」とヨーロッパの反核運動へ向けて旅に立つまえに
初出誌一覧のためのノート

I

1　核の大火と「人間」の声

私は大学を卒業しはしましたけれども、在学中に小説を書きはじめて、つまり学問は途中でやめてしまったものですから、大学時代の思い出に、また大学自体に複雑な気持をもっています。そこで、私は東京大学のフランス文学科を出ましたけれども、卒業してから大学に戻るというか、あらためてそこに入ったのは、ことしの五月祭に話しに行ったのが、正式にははじめてのように感じます。京都大学を訪ねましたのもはじめてで、このように教室で話をさせていただき、ありがたく存じています。

いまから十五年ほど前、私はまだハーヴァード大学の先生だったキッシンジャー氏のセミナーに参加したことがあります。広島の話をするというのが、私としての目的でした。ところがさきにいったように大学を途中で止めたにひとしく、この時分はとくに英語力がなかったものですから、前の日に準備していっても、五分も話すともう話は終ってしまうものですから、それからあとはほかの参加者の話をよく聞くほかにない。つまりは勤勉なメムバーでありました。(笑)　ヴィ

エトナム戦争の時期であり、広く反戦運動も行なわれておりました。その動きのなかで、作家ノーマン・メイラーもハーヴァード大学の大講堂に講演に来たのです。かれはしばらく前、西海岸のバークレーにあるカリフォルニア大学の構内で、「ひっくりかえったリンドン・B・ジョンソン」という講演をしたばかりでした。ヴィエトナム戦争を押しすすめるリンドン・B・ジョンソンは考え方が転倒している。われわれはかれの写真をひっくり返して、アメリカじゅうをそれで埋めようという呼びかけをふくむ話でした。これは雑誌にも載って、ひろく評判になったものです。ノーマン・メイラー自身もハーヴァード大学の出身ですけれども、その自分の出た大学の後輩の聴衆の前で、メイラーはまず講演の草稿を破って捨てる身ぶりをしました。それもはじめから意図してのことだったかどうか、結果は本当に捨ててしまったものですから、講演はかなり収拾のつかぬものになったように思います。「ノーマン・メイラー・アップ・サイド・ダウン」とヤジる学生もいたほどです。私はその際、学生たちがメイラーに対してチャレンジしているという感じを持ったのです。先輩の作家であるメイラーと知的に対等の立場に立ってチャレンジする。メイラーの意見を聞き、自分たちの意見をメイラーにつきつけることもしようという感じのものでした。今日も、そういう集まりになればと思いながらお話します。

私がこのところしばしば考えますことは、われわれ日本人にとってかけがえのない、代わりになることがもう誰もできぬような、独特な優れた人たちが死んでしまったということです。あの

人は死んだ、あの人たちは死んでしまったと感じることが、とくにこの五年ほど私には強いのです。そういう人たちについては、自分たちの世代はそれに置き換わることができない。端的に、自分はあの人の代わりになることができない。しかし後につづく若い人たち、とくに学問をやっている若い人たちのうちには、あの人たちの代わりになってくれる人たちがいるのではないか。かれらはあの人たちの代わりにならなければならないだろう。そうしなければ日本人の文化は、もっとも高く、もっとも深いところで伝承していかないだろうと思うのです。私は戦争直後の、貧しい状況に育ち、客観的にいって、あまり学問的な準備期間を持てなかった人間として、そういう死んでしまった大きい人たちと、若い人たちとをつなぐ役割をしたいと思います。直接、間接に、私はそれらの大きい死者たちを知っていますから。

原爆を受けて、その直後から広島で作家としての活動を始め、そして苦しい五年がたって、朝鮮戦争で、あらためて核兵器が使われるかもしれぬ、その可能性が具体化しそうになったとき自殺してしまった原民喜が、たとえばそのひとりです。現在の世界状況を考えますと、朝鮮半島で戦域核兵器が使われる可能性は大きくなっています。今日のそれと考え合わせても、原民喜という作家の人間と仕事は、覚え続けてゆかなければならぬと私は思います。そういう死者のことを伝えたい。また中野重治という作家がいた。あの人も死んでしまった。あるいは武田泰淳という人も死んだ。この人のことも伝えたいと思います。また、なかば無名の人間のなかにも、伝えた

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

い死者はいます。私の大学のフランス文学科の同級生で「ル・モンド」紙や「ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール」誌で働き、日本では「海」という文芸雑誌の編集長をして、二年前に白血病で亡くなった塙嘉彦。このジャーナリストは、地道にフランスのジャーナリストと日本の知識人をひきあわせ、かつ日本の文学や学問をフランスに伝えるということをした人でした。また、あなた方の先輩である高橋和巳さんのような人のことも思い出し続けていたいと思います。かれはその文学を、大状況をもよく表現しうるもの、つまり政治的な状況、社会的な状況をも書きうるものにしたい、むしろそれを中心の主題におきたいと考えていた作家です。そして『邪宗門』というような、また『日本の悪霊』というような優れた小説を書きました。それからいわゆる大学闘争に自分をかさねて、日本の戦後の思想史にきざまれてしかるべき、独自の仕事をしました。そのようにまるごと大状況の作家として働き、そのさなかで亡くなりました。それは諸君も先輩の生涯として記憶してゆかれるべきことであろうと思います。

私は高橋さんと酒場で論争したことがありました。あなたは大状況に立つが、自分は小さな状況から出発して文学をつくりだしたい、そのようにやっている人間だということを主張して。もともと小説は小さなイメージから出発する。ドストエフスキーにしても小さなイメージ、小さな言葉の面白さからまず出発して、小説を書いてゆく。その結果、小説全体が大きい人間社会のモデルとなるというわけなのだというようなことを、私はいったのでした。しかし高橋さんの死後、

あらためて考えてみると、私自身も小さな状況から始めてではあるが、やはり大きい時代全体のモデルを作りあげるような文学をめざしたいとねがっていることに気づくのであります。それを日本の現代文学一般にひろげてみるとどうだろうか、実際にそれがなしとげられているだろうかと、そのようにみずから問うようにしますと、現在、そのとおりだと答えることはできないように思います。高橋さんのように大きい状況を正面から書くという仕方の若い作家がいなくなった。もっぱら小さな状況を書くのみの作家が多くなってきた。それも小さな状況から書きすすめていって大きい状況に風穴をあける、大きい窓をあけるという作風の作家がいるかというと、そうではない。小さな状況に始まって、小さな状況に終るという文学のつくりかたに、現代日本文学の全体が疑問を感じていない、そのように見えるのであります。

それをアメリカの現代作家についてみればどうでしょうか？　アメリカの作家のうちには、小さな状況から出発しながら大きい状況へ向けて考える、文学の小世界にとどまらないで、社会全体に開いていく、そのような力をもった人たちがかつて多かった。いまはどうだろうか？　現にそれは多いと、私は考えているのであります。たとえば最初にいいましたノーマン・メイラー。かれが幾度目かの夫人をナイフで刺して警察につかまったことがありました。そのときかれは、自分は狂気ではない、発狂したのではなくて正気で妻を刺したと示したい、といいました。そうでなければ、いままで言ったり書いたりしてきたことが気違いのたわごとということになってし

まうという、悲痛な発言をしました。

メイラーという作家を、スキャンダラスな存在としてあつかう風潮がありますけれども、アメリカの戦後文学者として、つねにまともな仕事をつみかさねてきた人であります。第二次世界大戦で、アメリカは勝利をえたが、アメリカ人は精神に大きい傷を負った。それからなかなか回復してゆかない。アメリカ人が第二次大戦で負った、その精神の傷からどのように回復していくか。それがメイラーのテーマでした。そのようにしてかれは『裸者と死者』や『鹿の園』という小説を書きました。そしてまた、かれは冷たい戦争の批判者でした。ソヴィエトとアメリカとのあいだの冷たい戦争が、どのようにアメリカ人の精神を荒廃させているか。それを告発するのがかれの永年のテーマとなりました。そのうち、いわゆるデタントの時代があり、アメリカとソヴィエトとのあいだにかなり友好的な温かい状態があらわれた。それが現在また冷たい状態となっている。その時、現在のアメリカとソヴィエトの冷たい戦争の再発を見ながら、こういう状態がもたらしているアメリカ文化の荒廃ということ、病気ということを考えなおすのに、メイラーの仕事は有効です。メイラーがいってきた、冷たい戦争がどのようにアメリカ人を荒廃させているかということは、現在もその問題は解決されないでいる、むしろ悪化した問題としてある。そのようなアメリカの現在の状況を考えつつ、あらためてメイラーの「白い黒人（ホワイト・ネグロ）」以下の仕事を読みなおしてもらいたいと私は思います。

つづいてメイラーは、ヴィエトナム戦争にあたって秀れた批判の発言をつづけました。アメリカはアメリカ大陸まで前線（フロント）をひき下げよ、アジア人にアジアのことは任せよ、そしてアメリカはアメリカの文化的な偉大さ、アメリカ人の人間的な偉大さを回復しよう、ということを主張しつづけたのでした。私はそのようなメイラーに、よく大状況にとりくみつつアメリカの文化、アメリカの国家を考えてゆく作家を、しかもそれを持続する作家を見るのです。

それもメイラーのように戦争を体験した作家だけがそうかというと、そうではない。最近の若い作家たちも、それは私などよりも十歳以上若い作家たちですが、かれらのうちにも現在のアメリカの荒廃ということ、アメリカ人の病気ということを考える、そしてそれを何とか治したいとねがっている作家がいるように思います。

メイラーに典型があるように、第二次世界大戦のあと、アメリカの文学者がやってきたことはどういう仕事であったか。第二次世界大戦でアメリカ人が背負った心の傷を治したい。さらに冷たい戦争で深まる傷、ヴィエトナム戦争で深まる傷というものを治してゆきたいということが、アメリカの作家のねがいだったのではないか。そしてそのねがいは、若い作家たちのある者らにつたえられ、よく受けとめられているように思うのです。

メイラーたちが告発しつづけてきた、アメリカ社会に戦後ずっと続いた荒廃。そのなかで育ってきた人間が作家となり、若い作家としてそれを表現した文学として、私はジョン・アーヴィン

グという作家の仕事をあげたいと思います。ジョン・アーヴィングの新しい小説『ホテル・ニューハンプシャー』もアメリカ全土でベストセラーのようですが、その小説の前の“The World according to Garp”という小説が、かれを一挙に広く注目される作家としたのでした。ガープという主人公ですが、ガープによればこの世界はどのように見えるかという書き方の小説です。それはむしろ滑稽な、小説自体としてはパロディのような小説です。ガープという作家がいる。その作家がまだ少年と青年のさかいめのころ、一九六〇年前後に、永年看護婦としてかれを育てたお母さんとヨーロッパへいって、ウィーンで暮す。そこでの生活から小説を書きはじめもする。戦争を経験しなかった、ヴィエトナム戦争にすらも行かなかったアメリカ人の世代ですね、このガープは。つまりは現在のアメリカにおける若い世代を表現している小説だと考えていいと思います。

このガープという青年は小説を書こうとしている。かれのお母さんは若い看護婦として生きている戦争中、つまり第二次世界大戦のあいだの話ですが、映画館に入っていると若い男の兵隊がやってきて彼女の体にさわろうとする。逃げてもやってくるので、彼女は怒って、手術用のメスをポケットから取り出して、兵隊の腕の筋肉をスーッと切る。腕を解体してしまう。そして警察の世話になるような体験をする。そして lust と英語でいうもの、つまり、男性には女性に対する欲望がある、それを恐ろしいと思うようになる。そういう欲望とまったく無関係に自分は生き

ていたいと、娘は考える。しかし子どもは生みたい。そこでどうしたかといいますと、ヨーロッパの戦線で戦って傷ついた兵隊が、彼女のつとめる病院へも送られてくる。そして入院している。そのなかで言葉もいえない、体も動かせないガープという男に眼をつけた。その患者とまったく欲望と無関係な性関係をもって、赤ちゃんを生もうとするのですね。その男は軍隊の階級としては technical sergeant で、飛行機の銃座から機関銃を撃つ、そういう役割の兵隊です。その男がベッドのなかで夢かなんかを見ている。そこへ看護婦の娘がベッドへ入ってきて関係をもった。そして赤ちゃんをつくる。生まれた赤ちゃんに、T・S・ガープという名前をつける。T・Sというと、T・S・エリオットのような、トーマス・スターンズとでもいう名前の略語かと思いますけれども、そうではなくてテクニカル・サージェントの略です。つまりT・Sといっても、それをもとに戻した名前はない。ただT・S・ガープという少年を生んだ。

そのガープはお母さんに育てられて育ち、小説家になろうとする。そして小説家になるんですが、小説の後半では、自分の子ども二人と英文学を教えている奥さんと四人で、ニューヨーク郊外に住んでいるのです。それがほぼ現在と重ね合わせていいような時期です。その生活に大きなアクシデントが起こってしまった。奥さんがクラスの学生に試験をすると、ひとつの答案に「私はあなたを恋人にしたい」と書いてある。その青年に注目して、とうとう恋愛を始める。それがガープにばれてしまって、彼女は学生と別れようとする。学生はいやだという。それを説得しよ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com